

# 生命に特許はいらない！キャンペーンニュースレター

2020年 冬

## ひと、動物、キメラ

### 初のヒト-猿キメラに懸念

2019年8月

米ソーク研究所のフアン・カルロス・イズピスア・ベルモンテ教授率いる研究チームが、ヒト細胞を含む猿の胚、すなわち“ヒト-猿キメラ”を作った、との報告がある。この研究は、“法的問題を避けるために”中国で行われた。

<https://www.theguardian.com/science/2019/aug/03/first-human-monkey-chimera-raises-concern-among-scientists>

### 動物に悪用される遺伝子操作

2019年1月

CRISPR遺伝子編集技術は、医薬品やさまざまな素材を作り出すバイオリクターとしての用途を含め、工業生産システムの中で目的に合わせた動物を作り出すために幅広く用いられている。新たな遺伝子操作ツールによってGM動物研究が全世界的に加速しており、すでに300種以上の豚、牛、羊、ヤギが作られている。GM-free Action Alert (メール)

## 植物

### 除草剤に抵抗性を持つオオホナガアオゲイトウ

2019年8月

除草剤耐性GM作物に使われる複数の除草剤に抵抗性を持つようになっている雑草、オオホナガアオゲイトウ (学名 *Amaranthus palmeri*) をめぐり、米国の科学者らが警鐘を鳴らしている。今年3月、カンザス州立大学の実験圃場に生育しているオオホナガアオゲイトウの一部が、2,4-D除草剤を製品表示の指定頻度の18倍で散布しても枯れなかったことを、同大学のミティラ・ジュグラム教授 (雑草生理学) が確認した。

<https://www.gmwatch.org/en/news/latest-news/19078-king-of-weeds-palmer-amaranth-resistant-to-herbicides-used-on-gm-crops>

### モンサントがアフリカで推進する干ばつ耐性トウモロコシ、不首尾を確認

2019年3月

干ばつ耐性を持つとされる遺伝形質に組み換えられたトウモロコシ品種が、収穫量におい

ても普及率においても、従来の交配手法による非GM干ばつ耐性品種と比べて、低い結果となっていることが、米国農務省が最近公表した報告書で明らかになっている。

<https://www.acbio.org.za/en/failure-monsantos-drought-tolerant-maize-pushed-africa-confirmed-us>

### ゲノム編集作物が瞬く間に商用生産現場へ

2019年6月

米国のベンチャー企業Cybus社が、ゲノム編集したナタネ種子「Falco」の4品種を近々発売すると発表した。ゲノム編集した高オレイン酸大豆を“非GMO”として発売したCalyxt社に倣い、Falcoも非GMOとして市販される。Falcoはスルホニル尿素系除草剤に耐性を持つ。

Calyxt社はすでに、白渋病 (ウドンコ病) 耐性小麦 (2016) と高アミロース小麦 (2018) が規制や安全性評価の対象にならない、との通知を米国食品医薬品局 (FDA) より受け取っている。

<http://www5d.biglobe.ne.jp/~cbic/english/2019/journal1908.html>

### 加でGEトウモロコシに抵抗性を持つ害虫

2019年1月

ヨーロッパ・アワノメイガ (ECB) を殺すための組み換え遺伝形質に対して、この害虫が抵抗性を獲得している事例を、カナダ・ノヴァスコシアのトウモロコシ農家が報告している。害虫耐性を持たせる組み換え遺伝形質に対して、ヨーロッパ・アワノメイガが抵抗性を獲得している事例が報告されたのは、世界で初めてである。

<https://cban.ca/first-canadian-case-of-insect-resistance-to-genetically-engineered-corn-discovered/>

### 米国：4度目のGM小麦自生を確認

米国農務省動植物検疫局 (APHIS) は6月7日、米国ワシントン州でラウンドアップ耐性遺伝子組み換え小麦の自生を確認したと発表した。詳細は明らかにしていないが、2016年の発見以来4度目の自生確認となる。流通への混入はないとしている。米国では未だに遺伝子組み換え小麦の商業栽培は承認されていない。

有機農業ニュースクリップ 2019.06.08 ;  
2019.07.18

### GM作物の増加に伴い、除草剤の使用量も増加 2018年11月

業界は、GM作物を導入すれば農家の殺虫剤の使用は減ると約束していた。だが、カナダにおける除草剤の販売量は、GM除草剤耐性作物の導入以降、199%増加している。

<https://cban.ca/gmos/issues/pesticides/>

### モンサント社

### 母親グループを“叩きのめし”たかったモンサント 2019年9月

殺虫剤グリホサートの使用を中止し、GM種子の生産を止めるよう求める公開書状をモンサントに宛てて送った母親たちの運動団体

「Moms Across America」について、モンサントの上層部が2013年に、「叩きのめしてやりたい」と考えていたことが、関係者がリークしたメールによって明らかになっている。

<https://www.commondreams.org/news/2019/08/28/monsanto-doctor-wanted-beat-sh-t-out-group-mothers-emails>

<https://www.gmwatch.org/en/news/latest-news/19114-monsanto-doctor-wanted-to-beat-the-sh-t-out-of-group-of-mothers-emails>

### IARCがん研究を萎縮させる共和党の圧力に 2019年8月

2015年、世界保健機関（WHO）のがん研究支部である国際がん研究機関（IARC）が、除草剤ラウンドアップの有効成分であるグリホサートを「恐らく発がん性がある」カテゴリーに分類し、これをきかっけに、世界で最も使われているこの除草剤について、世界的な議論が巻き起こった。以降、連邦議会では4年間にわたり、共和党議員がIARCへの資金提供を中止するよう圧力をかけてきた。IARCに対して現在も続くこの政治的攻撃は、モンサントが一部お膳立てしたものであったことが、最近見つかった文書で明らかになっている。

<https://www.gmwatch.org/en/news/latest-news/19106-emails-show-monsanto-orchestrated-republican-effort-to-intimidate-iarc-cancer-researchers>

<https://theintercept.com/2019/08/23/monsanto-republicans-cancer-research/>  
Patents Intellectual Property

### 医療

### 初の“体内”遺伝子編集の成功を示唆する

2019年2月

ハンター症候群およびハーラー症候群の治療に取り組む米国の研究グループが、成人の体内でDNAを変化させる、体内での遺伝子編集に初めて成功したとみられる。ただし、これによって実際になんらかの治療効果が得られるかどうか確認するには時期尚早である。

<https://www.japantimes.co.jp/news/2019/02/08/world/science-health-world/tests-suggest-scientist-s-achieved-first-body-gene-editing-bid-treat-disease/>

### 失明すると言われた患者が

2019年1月

2018年10月、英オクスフォードのロバート・マクラレン教授が、失明の原因となるコロイデミア（先天性脈絡膜欠如）の遺伝子治療の治療に世界で初めて成功した。

<https://www.theguardian.com/science/2019/jan/19/they-said-i-would-go-blind-gene-therapy-has-changed-that>

### クリニックと患者を悩ませる残った胚の問題

2019年1月

不妊治療クリニックで、治療後に残った何万个もの胚が行き場を失っている。

<http://mainichi.jp/english/articles/20190118/p2g/00m/0fe/010000c>

### 世界初のGMウイルス治療で少女が危うく生還

2019年5月

イギリスで、10代の少女が薬剤耐性感染症の治療のため、世界で初めてとなる遺伝子組み換えウイルスの投与を受け、顕著な回復を見せている。

<https://www.theguardian.com/science/2019/may/08/teenager-recovers-from-near-death-in-world-first-gm-virus-treatment>

### 技術

### DNAを完全に書き換えた世界初の生物

2019年5月

イギリス、ケンブリッジの科学者らが、完全に合成による、DNAコードを大幅に書き換えた世界初の生物を作り出した。この微生物の存在は、医薬品や有用な原料を作ったり、ウイルス耐性などの新たな特質を加えるために、生物学

的機構を意のままに操った生物の創出へ、道筋をつけるものである。

<https://www.theguardian.com/science/2019/may/15/cambridge-scientists-create-worlds-first-living-organism-with-fully-redesigned-dna>

### 合成生物学（動画）

2019年6月

国連の生物多様性条約に提言付きレポートを提出する専門家グループが、6月初旬に会合を開き、合成生物学のさまざまな新規用途を検証した。

合成生物学は近年、ますます実験室外へとフィールドを移してきており、企業が屋外で実験を行ったり、野外環境で遺伝子組み換えを行っているケース——たとえば、ウイルスや遺伝子ドライブを用いて自然界の遺伝子構造を変えるなど——もある。

<http://www.etcgroup.org/content/video-lab-field-forest>

### 影響下で推進

2019年6月

国際自然保護連合（IUCN）が2019年5月、多くの議論を呼んでいるバイオテクノロジー分野である合成生物学に関するアセスメントを公表した。このレポートに携わった関係者の背景を調べると、その執筆者の大半が、もともと合成生物学——とりわけ遺伝子ドライブ——を強く支持する立場であったことを示す証拠が見つかる。加えて、その多くが利害の対立を抱えており、そのことが、彼らがIUCNに提出した「利害の対立」に関する署名文書で、部分的にしか明らかにされていない。

<http://www.etcgroup.org/content/driving-under-influence>

<https://corporateeurope.org/en/2019/06/efsa-gen-e-drive-working-group-fails-independence-test>

### 米軍の研究がGMウイルスを植物に拡散

2018年10月

米国防総省高等研究計画局（DARPA）が出資する研究プログラム「Insect Allies Program」は、直接その場で“ゲノム編集”することで植物の染色体に変化を起こすよう遺伝子を組み換えた感染力のあるウイルスを、虫を使って拡散しようというものである。市販種子の遺伝子組み換え（標的植物に組み換え遺伝子を導入する）は、これまで、実験室環境でのみ行われてきた。今回のDARPAの新たなアプローチでは、より迅速に、より大規模に、すでに畑で生育している作

物に対して、遺伝子組み換えを実施できるようになる。

科学誌『サイエンス』に掲載された意見書は、そのような水平環境遺伝的改変剤（HEGAAs）を生態系にまき散らせば、規制の問題や、生物学的、経済的、社会的な影響は計り知れないものになる、と警告し、この問題に関する幅広い社会的、科学的、法的な議論を呼びかけている。意見書の執筆者らは、このプログラムの内容が専門家の間でもほとんど知られていない点を強調している。

<https://biosafety-info.net/articles/biomedical-applications/biological-weaponsbiodefence/us-military-research-that-disperses-gm-viruses-to-plants-could-be-misused-as-bioweapon/>

### 知的財産、特許

判決を受け、修正後に畜牛ゲノム特許が認可へ  
2019年1月

アメリカ企業の畜牛ゲノム特許を阻止しようとした豪州食肉家畜生産者事業団（MLA）が敗訴した。連邦裁判所は、いくつかの修正を加えたのち、米国企業が出願していた特許申請を認める決定を下した。オーストラリアの主要家畜研究機関は、これにより、オーストラリアの家畜ゲノム研究が萎縮する恐れがあるとしている。

豪州食肉家畜生産者事業団（MLA）は2016年、成長率や乳量、サシの入り具合など、畜牛の重要な形質を特定する手法に関する特許を認めたオーストラリア特許庁（IPオーストラリア）の判断に異を唱え、Branhaven社を相手取り、訴訟を起こしていた。

<https://www.abc.net.au/news/rural/2019-01-23/federal-court-grants-controversial-cattle-genome-patent/10738820>

### ‘種から食肉まで’と“トウモロコシから乳まで”

2019年6月

欧州特許庁（EPO）が、特殊な工場で養殖されたサーモン（鮭）とトラウトに対する特許を認めた。この独占特許は、魚そのものとともに、魚の養殖と給餌もその対象としている。また、類似のケースとして、シンジェンタ社も、遺伝子組み換えトウモロコシのみならず、そうした作物を餌として与えて育てた動物の乳や肉の生産も自社の“発明”だと主張している。

<https://www.no-patents-on-seeds.org/en/node/590>



## シンジェンタのトマトに対する特許が取り消し

2019年1月

激しい反対運動を受けて、シンジェンタ社がトマトに対する特許申請を取り下げた。これを受けて、欧州特許庁（EPO）も特許番号

「EP1515600」を正式に取り消した。シンジェンタ社は、トマトの種子、植物、果実を自社の発明物として、特許を申請していた。だが、これらはすべて、実際には、ペルーとチリで発見されたトマト（植物）を掛け合わせて得たものであり、従来の交配手法に由来するものである。  
<https://www.no-patents-on-seeds.org/en/node/540>

## 貧しくさせられた国々（先進国）

### 遺伝子ドライブ—法と規制の問題

2019年7月

遺伝子ドライブ生物（GDO）に関する国際的で法的拘束力のある効果的な規則の制定が、早急に求められている。“従来の”GMOを対象に制定された既存のバイオセーフティ規則は不十分であり、GDO特有のリスクに完全には対応しきれない。拡散性と粘り強い持続性こそがGDOのそもそもの存在理由であり、国境を越えて拡散する高い潜在力—特に“グローバル”遺伝子ドライブを含むGDOの場合—を有するため、これまでと異なる法や規制の問題が生じている。

<https://biosafety-info.net/new-publications/new-book-gene-drives-legal-and-regulatory-issues/>  
<https://www.nature.com/articles/d41586-019-02087-5>

### アフリカはいますぐグリホサートを禁止に

2019年8月

先進工業諸国でグリホサートとグリホサート系除草剤（GBH）の禁止措置が進む中、メーカー各社は、まだその使用が認められている国にこれを押しつけようとしている。アフリカ大陸でグリホサートとGBHの使用が禁止になれば、その後は、他の有毒な殺虫剤がその代替品として大量に市場に流入することになるだろう。

<https://www.acbio.org.za/acbio/web/en/africa-must-ban-glyphosate-now>

### 南アフリカの主食の汚染が進む

2019年9月

南アフリカ政府は、極めて毒性の強い除草剤「2,4-D」に抵抗できるよう開発された3品種の新しい遺伝子組み換えトウモロコシを近々認

可する見込みであり、アフリカ生物多様性センター（ACB）が強い懸念を表明している。

<https://www.gmwatch.org/en/news/latest-news/19123-more-poisoning-of-south-africa-s-staple-food>

### オランダはアフリカの食糧を“盗んだ”のか

2019年5月

エチオピアや隣国のエリトリアでは、タンパク、鉄分、食物繊維の豊富なグルテンフリー穀物のテフが、2000年以上にわたり栽培されてきた。収穫されたテフは製粉加工され、主食である「インジェラ」を作るのに使われる。

テフ粉と関連するテフ製品の加工に関する特許は、現在、オランダの企業の手に渡っている。在来種の専門家であるブラ・ワイエッサ博士は、オランダが特許を握っていることにより、何百万ものエチオピアの農家が権利を剥奪されていると考えている。

<http://www.bbc.com/travel/story/20190508-did-the-dutch-steal-this-african-food>

### 食糧農業機関（FAO）種子条約の拡大

2019年7月

2019年11月、「食料および農業のための植物遺伝資源に関する国際条約（ITPGRFA）」のワーキング・グループが、失敗に終わった利益配分ファンドを補正する草案を提出する。その中で、農家の権利や、先住民、地域コミュニティの人権を脅かす社会的および経済的不正を引き起こす深刻なリスクがあるため、条約の対象範囲を「すべてのPGRFA（食料および農業のための植物遺伝資源）」まで拡大することは、多くの先住民、地域コミュニティ、発展途上国にとって望ましいものではない、と結論している。現場のPGRFA保全の最前線にあるこれらのコミュニティが、遺伝資源から切り離され、条約のせいで利益を損なわれかねないという実状は、本来、彼らを支援することを目標とした条約であることを考えれば、手痛い皮肉である。

<https://www.twn.my/title2/biotk/2019/btk190602.htm>  
<https://www.twn.my/title2/biotk/2019/btk190602/Seed%20Treaty%20Expansion%20final%2016%20June%202019.pdf>

### インド—魔法の種子、破られた約束

2019年9月

2000年代初め、インドでは、殺虫剤の使用を劇的に減らし、収穫量を増やし、農家を経済的に潤すとして、Bt綿が大々的に売り込まれた。だが、除草剤の使用量はBt導入以前と同じレベルに戻り、収穫量も伸びないか、むしろ落ち込

んでいる。農家はいまや、化学バイオテクノロジーの悪循環に陥っており、Bt/殺虫剤に抵抗性を持つ害虫の増加と生産コスト増への対応を迫られている。結果として、多くの小規模綿生産農家が、さらなる負債を抱えることになっている。

<https://www.gmwatch.org/en/news/latest-news/19124-gmos-magic-seeds-broken-promises>

## 南における植物特許の現状

2018年12月

この数十年の間に、植物や植物の一部分に対する特許取得が世界各地で急増している。だが、植物特許の拡大に関連する研究の大半は、先進国——とりわけ米国と欧州連合（EU）——のみを視野に入れたものであり、世界のその他の地域で植物に対する特許がどの程度進んでいるのかについては、ほとんど知られていない。本研究報告は、この情報の欠落を埋めることを目的としており、グローバル・サウスの発展途上国および新興経済地域における植物特許の現状を概観するものである。貧困の克服を支援する活動を広く展開する「オックスファム」は、植物や植物の一部分、DNA配列に対する特許の増加と範囲の拡大によって、関係するすべての人々が再交配や再播種のためにこれらを自由に入手できなくなり、食糧や栄養の安全確保が脅かされることになる、と危惧している。

<https://knowledge4food.net/the-status-of-patenting-plants-in-the-global-south/>

<https://oxfam.app.box.com/s/f510b0wtcko2ifeksm9xuaso4dhbpg9r>

日本

## ゲノム編集食品

### ゲノム編集食品、食品表示義務なし

2019/9/19

狙った遺伝子を切断する「ゲノム編集」技術で開発した食品について、消費者庁は19日、食品表示を義務化せず、ホームページなどでの任意の情報提供を求める方針を示した。消費者団体などから食品表示を求める声があるが、安全面では従来の品種改良と同程度のリスクであり、科学的にも見分けられないことなどから判断した。早ければ年内にも流通する。

<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO49976870Z10C19A9000000/>

<https://www.asahi.com/articles/ASM714F51M71ULBJ00D.html>

## シビリアンコントロール

2019年8月

3・11の原発事故を経験した私たちは二度と原子力科学技術に対する安全神話の上で眠ることができないことを頭から叩き込まれた。ただし、さりとて、その覚醒をどうやって具体化したら、二度と科学技術の事故を避けられるのか、いまだ、その暗中模索のさなかにある。

その暗中模索のひとつが、先端科学技術に対する市民の監視・チェック（シビリアンコントロール）を具体化することだ。気が遠くなるような話だが、人類が生き延びることを願う者にとって避けて通れない課題だ。

その先端科学技術に対するシビリアンコントロールが、5年前、理研女のスタップ細胞の実験ノート騒動でもお馴染みの実験ノート、つまり先端科学技術の実験の生データを記録した実験ノートの情報公開だ。これにより、先端科学技術ムラの人たちがどんな（危険な）実験を実施しているのか、その生の姿が開示されるからだ。

なので、一般市民の前にその正体を現さないが、先端科学技術ムラの人々は、内心、この実験ノートの情報隠しに死に物狂いだ。私たちは、2007年から、人類の生存に関わる危険な実験を実施している遺伝子組み換えイネの実験に関する実験ノートの情報公開を求めて開示請求、審査会への異議申立、全部不開示処分取消の裁判をやってきたが、先端科学技術ムラの死に物狂いの妨害の前に敗北を重ねてきた。しかし、そんなことで諦めるわけにはいかない。人類が生き延びるために避けては通れない課題なのだから。

[lifepatent:1792] 【報告】バイオ事故に対する市民の監視・チェック（シビリアンコントロール）を追及する第三次実験ノート裁判の提訴

## ひと、動物

### 「人間」を拒絶しないブタ 再生医療で移植臓器に期待

2019年5月

免疫に関わる細胞を作る臓器を取り除き、体外からの異物を拒絶しない状態にしたブタを、慶応大の小林英司・特任教授らが生み出した。体内で人間の臓器を作る再生医療の研究に役立つという。

<https://www.asahi.com/articles/ASM5N72QFM5NULBJ01J.html>

### ブタ体内で人の膵臓

2019年4月

東京大の中内啓光特任教授は、人工多能性幹細胞（iPS細胞）を使って、ブタの体内で人の膵臓（すいぞう）をつくる研究を実施する方針を明らかにした。将来、移植医療用として使うのが目的。学内の倫理委員会と国の専門委員会による二段階審査で認められれば、2019年度中にも国内で初めて人の臓器を持つ動物をつくる実験に着手する。

人の臓器を持つブタは、動物の受精卵（胚）に人の細胞が混じった「動物性集合胚」からつくくる。文部科学省は、こうした胚を子宮に戻して動物を誕生させるのを禁じてきたが、三月に指針が改定され研究が解禁されたのを受けて、チームは研究に取り組むことにした。

<https://www.tokyo-np.co.jp/article/national/list/201904/CK2019042902000146.html>

### ヒト受精卵のゲノム編集、遺伝病研究を容認 治療法へ道

2019年4月

「ゲノム編集技術」で人間の受精卵の遺伝子を操作する基礎研究をめぐり、政府の生命倫理専門調査会は22日、遺伝病の治療法の開発などを容認する見解をまとめた。現時点では安全面や倫理面から、その受精卵で子どもを誕生させることは認めないが、受精卵の遺伝子改変による遺伝病の予防に道を開くことになる。来春にも研究が認められる見通し。

<https://www.asahi.com/articles/ASM4J5W4YM4JULBJ00D.html>

### ラット使いマウス腎臓作製 受精卵にES細胞注入

2019年2月

さまざまな組織に変化する「万能細胞」の一種の胚性幹細胞（ES細胞）を使い、ラットの体内でマウスの腎臓を作ること成功したと、生理学研究所（愛知県岡崎市）などの研究チームが英科学誌電子版に発表した。

チームはこれまで、同様の手法でマウスの体内でラットの膵臓（すいぞう）を作ることにも成功。この技術が応用できれば、ブタなどの大型動物で人間の臓器を作れる可能性があり、チームは「移植用の臓器を作製する再生医療の発展に貢献できる」としている。

<https://www.sankeibiz.jp/econome/news/190206/ecb1902061325001-n1.htm>

### 寿命つかさどるたんぱく質を発見 自食作用抑える 阪大など研究チーム

2019年2月

寿命や老化現象に関わるたんぱく質を発見したと、大阪大などの研究チームが19日、英科学誌ネイチャーコミュニケーションズ（電子版）で発表した。細胞内の不要物を分解する「オートファジー」（自食作用）を抑えるたんぱく質で、細胞内で作れないようにしたハエや線虫は寿命が1.2倍に延び、マウスはパーキンソン病の発症が抑えられたという。

<https://mainichi.jp/articles/20190219/k00/00m/040/145000c>

### 医療

#### 遺伝子治療の普及策を探れ

2019年2月

厚生労働省の専門家会議が、遺伝子操作技術を使う新しいがん治療薬などの承認を了承した。日本では副作用の不安などから遺伝子治療は敬遠され、米欧に比べ利用が遅れているが、より安全で効果的なものも開発されている。官民で普及策を検討すべきだ。

今回承認されるがん治療薬は急性白血病などが対象で、スイスのノバルティスが開発した。米欧では既に製品化されている。

<https://www.nikkei.com/article/DGKKZO41772500W9A220C1EA1000/>

<https://www.mhlw.go.jp/content/10808000/000541356.pdf>

#### カルタヘナ法に基づく行政処分等について

2019年5月7日

農林水産省は、本日、群馬県蚕糸技術センターに対して遺伝子組換え生物等の使用等の規制による生物の多様性の確保に関する法律に基づく行政処分を行った。

カルタヘナ法第14条第1項に基づき、HC-EGFP 遺伝子導入緑色蛍光タンパク質含有絹糸生産カイコの使用等を中止するとともに、当該カイコについて拡散防止措置を執ることを命じた。当該カイコを使用等する場合には、改めて農林水産大臣の確認を受けることを命じた。

カルタヘナ法第13条第1項の規定に基づく拡散防止措置について農林水産大臣の確認を受けずに遺伝子組換えカイコを第二種使用等していたこと。

<https://www.env.go.jp/press/106744-print.html>

数十万人の遺伝子データ収集、まず従業員から東芝募る



2019年8月

東芝が新事業を育てるため、日本人従業員1万人分の遺伝子データ収集を始めた。集まった遺伝子データを解析し、個々人の体質に合わせた病気の治療法や予防法を提供するのが目標。

<https://www.asahi.com/articles/ASM8X5G1KM8XULFA01F.html>

## 植物

### 違法なGMワタを検出

2018年11月

食用や飼料用、衣料などに利用されているワタ。なかでも海外から多く輸入されている遺伝子組み換えワタは、法律（カルタヘナ法）上、一般の畑では栽培できないことになっている。しかし、農民連食品分析センターの調査で、国内で栽培されているワタに違法な遺伝子組み換え品種が混入している可能性があることがわかった。

<http://www.nouminren.ne.jp/newspaper.php?fname=dat/201811/2018112601.htm>

### 山田正彦 タネの本

山田正彦さん（元農林水産大臣・弁護士）は、最近の著書『タネはどうなる?! 一種子法廃止と種苗法運用でー』（サイゾー、2018年6月25日）の冒頭で創世記1章11節を引用しつつ、「タネは、人類にとって最も大切なものであることを聖書も示唆しているのではないだろうか」と述べ、タネをしっかりと守らなければと訴えている。

<https://www.amazon.co.jp/dp/4866251042/>

### 食品安全委員会 遺伝子組み換えジャガイモは安全と評価

2019年8月

食品安全委員会は8月6日、米国のシンプロット社の疫病耐病性・アクリルアミド生成量低減

遺伝子組み換えジャガイモ（SPS-000Y9-7）について「ヒトの健康を損なうおそれはない」とする遺伝子組み換え食品等専門調査会の健康影響評価を了承し意見公募を始めた。

有機農業ニュースクリップ 2019-08-20 No.999

## 特許

### 日本発の果実、中韓に流出 農水省が保護へ法改正

2019.5.25

農林水産省が、国内で開発された農産物の新品種保護の強化に向けて、種苗法を改正する検討に入ったことが25日、分かった。新品種の海外流出が問題になっているため、農産物の輸出を阻害する事態に歯止めを掛ける狙い。


<https://www.sankei.com/economy/news/190525/ecn1905250037-n1.html>

### 和牛精液あわや国外へ

2018年11月

輸出禁止の和牛精液が日本国外へ不正に持ち出されていたことが、農水省への取材で分かった。中国入国時に見つかり中国国内への流出は水際で止められたが、日本の検査はすり抜けており、検査体制の甘さが浮き彫りになった。畜産関係団体は「和牛精液が流出し、他国で生産が広がれば和牛の輸出先を失う。畜産農家は大打撃だ」と危惧する。

<https://www.agrinews.co.jp/p45916.html>

 ニュースとイベントに関する情報のため：日本消費者連盟のウェブサイトとFacebookを見ましょう。

<http://nishoren.net/>

<https://www.facebook.com/nishoren/>